

# 平成28年度学校教育審議会（第2回）議事録

1 日 時 平成28年8月24日（水） 午後1時30分～午後4時11分

2 場 所 福島テルサ 3階 「あぶくま」

3 出席者数 16名

## 4 出席者

伊藤 信弘 委員	小沢 喜仁 委員	川上 雅則 委員
菅野 誠 委員	菊池 克彦 委員	菊池 真弓 委員
佐治 和則 委員	佐藤 浩子 委員	杉内 亜希 委員
錫谷 和子 委員	橘 文紀 委員	中山 美華 委員
早川 正也 委員	森 涼 委員	吉田 尚 委員
和合アヤ子 委員		

## 5 資料

資料は下記①～⑦のとおり。

- ① 学校教育審議会高校訪問アンケートでの意見（概要）
- ② 学校教育審議会（第1回）及び同部会（第1回）における主な意見
- ③ 県内各地域の特性等について（概要）
- ④ 進路に関する意識調査について（概要版）
- ⑤ 県立高等学校改革の総括について（概要）
- ⑥ 第1回学教審と部会におけるご意見をもとにした論点整理
- ⑦ 福島県学校教育審議会の当面のスケジュール

## 6 開 会

委員16名の出席を得て、午後1時30分に開会。

## 7 報告事項

教育総務課長より、委員の解嘱及び委嘱について報告があった。

## 8 議事録署名人の決定

## 9 議 事

### (1) 学校教育審議会学校訪問の主な意見について

7月に実施した学校訪問について、参加した委員を代表して3名が感想や意見を述べた。

### [委員]（中通り）

A 高校は、生徒も教員も一生懸命な姿勢が見られた。利便性を考えると郡山地区に近いこともあり、規模としてみても存続に疑問を持っていたが、小中学校時代に不登校であった生徒が、高校入学後に充実した学校生活を送って卒業していくという話を

聞いたり、少人数で一人一人に目が届く教育が行われているのを実際に目にしたりしたことで、存続の必要性を強く感じた。

データ上の記録のみで判断するのではなく、視察等を通じて現状を把握することが重要であると感じた。

また、B高校は、きめの細かい実務的教育が行われている。生徒は目標を持って学習活動に励んでおり、各授業は専門ごとに分かれていた。生徒が授業に取り組む姿勢も真剣であり、生き抜く力を体得しようとする姿勢が感じられた。

C高校は、大規模校で偏差値レベルも高い。教室の後ろまで一杯に生徒がいた。一方で、進学校も少数精鋭化をはかり、質の高い教育を行う必要性を感じた。

### **【委員】（浜通り）**

D高校は、海に近い、よい環境の地域に立地している。生徒達が伸び伸びと育つであろうと思われた。少子化の影響でクラス減により空き教室が増えていた。空いているところにまた別の学校が入る計画についても説明を受けたが、設備の管理にも苦勞している様子うかがえた。

E高校は、福島にとって、新しい取組を象徴している学校である。様々な特色ある授業が展開されていたが、施設設備は本来のものではなく、そのような環境で新しい教育に取り組む先生方の苦勞が理解できた。結果をすぐ出さなければならない、という厳しい状況だが、最先端の教育をみんなで支えていく姿勢が求められる。

### **【委員】（会津地方）**

F高校は、自然環境が豊かで、子ども達が落ち着いて学校生活を送っていた。生徒一人一人に目が行き届いており、勉強や生活のこと等について相談がしやすい環境だと感じた。地元になくてはならない学校である。中高連携を行っている地域の一つであるが、問題点としてあげられていたのは、連携によって学力をつけた子ども達が、都市部の若松市内の高校に進学してしまい、F高校に入学しないということである。

G高校は、充実した施設で、子ども達にも活気が見られた。様々な地域から生徒が集まるので、その分、様々な考えに触れることもでき、よい刺激を受けることができると思う。

## **（2） 学校教育審議会部会（第1回）の議事内容の報告について**

高校教育課長から、資料②～⑤により説明があった。

続いて、部会員を代表して委員から、資料②により第1回部会の内容についての報告があった。

### **【委員】**

（資料②により報告。）中山間地域においては、本当にその学校を必要とする生徒がいる限り、受け皿は必要であると強く感じた。

経済的な理由により都市部の進学校がクラス減となると、さらに格差が広がるのではないかと懸念される。倍率が高まると塾に通う生徒が増え、そこで格差が生まれてくるのではないかと懸念される。

## **（3） 論点整理**

高校教育課長から、資料⑥により説明があった。

**【委員】**

「生き抜く力」とは、知識をしっかりと身に付け、協働できることではないか。

**【委員】**

多様な意見が存在する中で、いかに折り合い、行動に移していくかという力は大学生でも足りない現状である。行動力、経験の力、まとめる力が必要である。

**【委員】**

じっくり考えさせることも必要で、そのことに加え、アクティブ・ラーニングで深く掘り下げたり、自ら課題を見つけて学ぶ力を育むなど、いろいろなやり方があると思う。授業以外にも部活動等において協調性を育んだり、リーダーシップやフォロワーシップを学ぶなど、学校生活の中でトータルに「生き抜く力」を育成しているのだと言える。

震災前と後とでは生徒の様子に劇的な変化が見られた。福島に対しての気持ちは育まれており、福島ならではの教育プログラムの作成ということについては、気運としては培われているのではないかと考えた。

**【委員】**

JA グループの農協大会において、農業高校に発表を行ってもらっている。学んだことを実践に移し、成功を体験することは非常に重要であると実感している。地域と高校が一体となった取組は非常に有効であると感じている。

**【委員】**

地域の魅力を知ってもらえるように、地域と学校の関係性を高めていきたい。相馬野馬追にも主に小学校1年生から6年生が関わっている。1～3年生は神輿を担当している。4～6年生は夏休みの課題で絵画が課されており、それが後に全国展として発表されることとなり、その結果、地域の魅力を全国に発信している。

**【委員】**

創造力、creativityが必要である。予測不可能な世界を創意工夫で生きていかなければならない。創造力を育む教育を日本でも行っていかなければならない。これからの若者に必要なのは創造力である。創造力という観点を「生き抜く力」に入れてもらいたい。

**【委員】**

いわきでは中学生を対象に「志塾」を3年前から開催している。中央官僚、医療、法律、スポーツ等、様々な分野から各界のトップ10名を招き、ワークショップを開催し、その人達の生き方や考え方を学んでいる。協働性という観点からも、人間性の涵養も重要である。目標を学校だけで閉ざさず、社会と共有することが必要である。

学校と社会が同じ土俵で生徒を育てていくことが求められる。

**【委員】**

「生き抜く力」の定義をもっと膨らませる必要があると思う。

我々の教育の目標は、「生き抜く力」を身に付けて生きていける人を作るということ

とであると思う。

子ども達を育てるのには、学校の力だけでは無理であり、社会を巻き込む必要がある。2、3学級の学校になれば、なおさら、生き抜く力を育むプログラムに地域が入ってくる事となる。

#### **【委員】**

「福島ならではの教育プログラム」とはどんな力を育成するのか。それは自然、社会と積極的に関わり、生き抜こうとする力であると思う。コミュニケーション力とも言われるが、ただ話すだけの力ではない。いつでも、どんな人とでもやっていける力である。

地域を巻き込むという観点から言えば、地域には素晴らしい伝統、文化がある。これらに関わらせることが重要だ。

#### **【委員】**

地域と連携して農業体験を行ったり、他との関わりを持つことで学ぶことは多いと思う。小規模校であっても高校存続の意義は大きい。学力面でつまづいたり、人間関係で悩みを持っているような、様々な子どものための場所を確保するという観点から、学級数や定数を考えていけばよいと思う。

#### **【議長】**

子どもが地域のことを理解するためには、地域の祭りに参加してみて、踊ったり、神輿を担いだりすることは重要で、そこに必要となるのは、継続性という観点である。この継続ということについては学校が不得意とするところであり、保護者や地域が担っているのが現状である。

もう一つの仕掛けづくりとして重要な点に産業というものがあると思う。

#### **【委員】**

産業と学校は従来は結びつきが弱かった。現在、商工会議所に呼びかけて、両者を結びつけることに取り組んでいる。学校が企業を訪問していろいろと話を伺うという形が主だったが、今では、企業が学校を訪問して、授業参観して、その後意見交換を行っている。意見交換には、地域での就職を希望している生徒も加わっている。

#### **【委員】**

あまりに多くのことを学校に求めて、果たして実現ができるのか、疑問である。生きる力という抽象的な言葉の中に何でも入れ込むことが可能なのか。資料にある「生き抜く力」の説明として記載してある内容は、並列ではない。基礎的な力があってその他の力があるのだと思う。

高校教育においては、学力の向上が第一である。進学校であれば受験力、実業高校であれば実践的な力をつけることが最も重要だ。私も話を聞いていて考えがまとまらない。現場の先生方も同じく混乱するのではないか。

#### **【委員】**

これからの学校がどうあるべきか、ということに加え、地域が学校をどう育てていくか、という視点が重要になってくる。そのような学校づくりも必要だと思う。

**【議長】**

「生き抜く力」のメッセージ性について分かりにくい、という点はその通りかと思う。基礎的な知識や技能、学ぶ意欲以下は並列ではなく、繋がっているのではないか。当然、基礎的な力から思考力、判断力が生まれるのだろうと思う。資料⑥の1ページ目については、出していただいたご意見をもとに、事務局にまとめてもらうこととしたい。

**【委員】**

福島ならではの、という視点でいうと、この学教審において「原発事故」という言葉を入れたいし、教育の現場にもぜひ入れていただきたい。福島ならではの、「生き抜く力」を育成するためには、この問題に向き合っていくことは重要であると思う。

**【議長】**

震災後の防災教育について、事務局から手短にお話しいただければと思う。

**【高校教育課長】**

防災教育に関しては、例えば、ふたば未来学園高校が「ふるさと創造学」の授業の中で、津波被害の現場に赴き、地域の方々より聞き取り調査を行う等の取組を行っている。また義務教育課においては、冊子を作成し、心の繋がりの大切さを確認するとともに、その冊子を全国に送って、知っていただく試みを行っている。

**【議長】**

ふたば未来学園高校以外の避難している学校における取組はどうか。フォローアップの状態を知っておくことは重要である。次回の部会までにそのあたりをまとめていただきたい。

**【委員】**

福島においては、教育の土台となる、それぞれの家庭での教育の在り方への意識を高めていく必要性を強く感じる。この学教審における先生方の熱心な議論が、この場だけのものではなく、広く県民に周知され、県民の意識が高まることを願う。

**【委員】**

学校の適正規模と統廃合については、定性的に行う必要があるのではないか。それぞれの学校の存在の大きさを考えたときに、このような思いで存続させる、との理由があれば、定量的に学校規模を決める必要はないのではないか。

**【委員】**

適正規模とはどのような意味か。

**【高校教育課長】**

適正規模とは各都道府県が判断し、策定しているものである。幅広い進路選択が可能となるような教科、あるいは学科の配置、特別活動や幅広い部活動の選択、個性との出会い、社会性の育成、以上のような観点から望ましい規模を「適正規模」と捉えている。法的なものではない。

「一次まとめ」と「二次まとめ」においては適正規模を4～8クラスとしてきた。

4～8としたのは平成11年であり、平成22年度に全県下で完成となった。平成10年度から平成28年度までに生徒数が一万人減少することを踏まえた内容であった。二次まとめの内容に従ったものである。

**【委員】**

適正な規模という話が出ているが、先ほど塾に行く必要性がでてくるとの話があったが、塾に行かなくても進学ができる、とすればよいのではないか。教員数が解決策となるのであれば、それも福島ならではの、ということで、税金を使って人を増やせばよい。

**【委員】**

敢えて下限を設定する必要はないのではないかと。上限だけを決めるという考え方もあると思う。

**【委員】**

私もその考えでよいのではないかと思う。18才までは親元で生活することが普通なので、それぞれ7つのエリアで特色を出すこととするのがよいと思う。

私学については、様々な建学の精神に則り特色を出している。県立にないものを私立に求めるということによいと思う。

**【委員】**

総合学科が導入された当時は、現在あるような2クラス規模の学校は想定していなかった。ある程度の規模があり、教員数も揃っている条件において、多様な学科が開設可能となる。特に総合学科については、ある程度の整理、見直しは必要である。

**【高校教育課長】**

いわゆる中山間地域においては、2クラス規模以上の学校が、本校となっている。例えば2クラス規模の学校が、3年連続で定員の半数に満たない場合は、分校とすることとなっている。現在では、1クラス規模の学校は分校となっている。分校についても、3年連続で定員の半数に満たない場合は、募集停止とすることとなっている。

しかし法改正により、1クラスでも本校として存続させることが可能となった。そのことに伴い、1学級本校化の議論は想定していたが、下限を全てなくすとすると、話はまた別となる。

**【教育次長】**

教育活動を行っていく際に、ある程度、集団として適正な規模というものがあると思う。現在、いくつかの市町村において小中学校の統廃合が行われている。統廃合を行う考え方のベースにあるのは、統廃合により通学が困難となる生徒が出てきたとしても、別の手当てを行うことでそれをカバーし、ある程度の規模で集団活動を行う環境を整えることではないか。

もちろん、数にかかわらず、という御意見も承知しているが、このような内容も含めて御意見をいただければと思う。

**【委員】**

部会に向けて、2学級規模の学校でどのような問題点があるのか、資料を準備いた

だきたい。もっとこのようなことをやりたいのだが、学校規模等の環境面が理由でできない、ということが分かるように資料で示していただきたい。長所と並列しながら考えていければと思うので、よろしくお願ひしたい。

#### **【議長】**

高校も例えば1年生と3年生が一緒に学ぶということができない。そのようなことができれば、また違ってくると思う。アメリカの学校は科目という概念が強い。学年制を越えた学びが可能である。そもそも科目は積み上げるものである、という考え方に立っていない。日本の学生もそのような学びに耐えられるのではないか。学年制や生徒が持っているコミュニティーを崩す考え方も必要だと思う。

#### **【教育長】**

本日は貴重な御意見をいただいたことに感謝申し上げたい。

総合学科に関する御意見はその通りであると思う。また適正規模について説明を尽くして欲しいという御要望についても応えていきたいと思う。我々としては教育効果が最大限上がる、理想的な学級数の規模というものがあるものと思っている。教員もそれに見合う数の配置が必要であり、その予算の裏付けも必要であるので、その想定は欲しいところである。

過疎・中山間地域においては、御意見の通り、学級数の下限を設けないとすると、例外とされている以外にも例外が存在することとなる。仮にそうだとすれば、それはどのような場合か、お話しいただきたい。

また、生き抜く力や学力について、分かりにくいとの御意見をいただいた。その通りだと思う。私自身も学力とは何かを突き詰めて考えると、時に悩んでしまう。

また、「原発事故」という言葉が入っていないので、入れるべきであるとの指摘をいただいた。私もそのように思う。資料に入っておらず申し訳ない。他県の子ども達と比べ、うまくいけば本県の子ども達が財産としていけるものである。

貴重なご意見に感謝申し上げます。

### **10 その他**

教育総務課長より、資料⑦により今後の予定について説明があった。

#### **【議長】**

部会は9月と10月に開催予定であり、その内容は審議会においても報告させていただく。中間まとめに向けて議論をお願いしたい。我々の議論を広く知ってもらうことも重要である。

### **11 閉会**